

カトリック山手教会月報

やまて



編集・発行 カトリック山手教会 広報委員会 〒231-8652 横浜市中区山手町44番地
☎ (045) 641-0735 <http://catholicyamate.org/>

第614号 2021年4月11日

鈴木真師 主日ミサ説教

2020年12月20日：待降節第4主日B年

ルカによる福音書 1章26-38節

「お言葉どおり、この身に成りますように」この言葉ゆえに、カトリック教会は聖母マリアに特別の尊敬を持っている、と言っても過言ではないでしょう。自分の望みや都合ではなく、神さまがなさることにこの身を委ねていく。〈どうぞ、あなたがなさるわざに、このわたしを道具としてお使いください〉。これこそ、信仰者のあるべき姿である、というわけです。

しかし、神さまがなさることは、しばしばわたしたち人間には理解不能ですし、都合の悪いことだってしょっちゅうです。マリアにしても、いいなずけがいるこのタイミングで身ごもることは、まさに「ありえない」ことだったでしょうし、マタイの箇所がおわすように、ことが公になったら石打の刑にもなりかねません。ルカは、その場でマリアが受け入れたように描きますが、実際には何日も、あるいは何週間も悩んだかもしれません。でも、最終的にマリアは「あなたのわざが行われますように」と、その身を差し出しました。いつも言うように「わたしが」ではなく「神さまが」という視点に立った、と言えるでしょう。

かつてビートルズが「Let it be」という楽曲にこの箇所を使いました。わたしは中学1年の時に「Let it be」を初めて聴いて、歌詞の意味もわからずにいい曲だなあ、と思いました。それを母に言うと、

「あら、知ってるわよ。有名な曲じゃない。確か聖書のことばが使われているそうよ」と言われてびっくりしましたが、その時は、きちんと調べませんでした。神学生になって、改めてこのルカの箇所を味わうとともに「Let it be」の歌詞をよく見ましたが、誰の訳詞にもどうも満足できず、たいして英語に強くないのに自分で日本語訳を付けました。新共同訳は「お言葉どおり、この身に成りますように」と訳しますが、当時のわたしには「み旨のままに」という言葉がぴったりくるように感じました。近年、歳をとってもお元気なポール・マッカートニーさんが、たびたび日本に来るようになって、再びラジオなどで「Let it be」が流れるようになりましたが、50年たってもやっぱりいい曲だな、と感じます。それもすごいことだなと思いますが、これこそ「みことばの力」、と言うべきでしょうか。

話は変わりますが、わたしの父は、わたしが5歳のときに突然亡くなり、あまりに突然だったので墓がなく、しかたなく父方の祖父が自分のために建てた、お寺の墓地に納めました。母は、それが相当嫌だったらしく、こつこつとお金を貯めて鎌倉霊園に墓を造り、父の17回忌のタイミングで骨をそこに移しました。その時、わたしはすでに神学生でした。墓を造るにあたって母が「墓石に聖書の言葉を入れたいから、あんた選んで」と言うので、わたしは迷うことなく「聖旨(みむね)のままに」としました。

無事納骨が終わったあとで、母がぼそっと「でもこの言葉って、ちょっと怖いわよね」と言うので、

「なんで？」と聞いたら「だって、すべてを神さまに委ねてしまうわけでしょ。何があっても文句言えないじゃない」…。うーん、神さまに文句言ってもしょうがないけどな…と、その時は思いましたが、自分が実際司祭になってみると、「み旨のままに」とか言いながら、かたわらで「ちょっと神さま、それだけは勘弁してくださいよ」と文句を言っている自分に気付かされます。

なかなか「神さまが」に徹することができませんよね。そんなわたしたちが、せめて「あなたのわざに、このわたしを委ねることができますように、少なくとも、それを求めることができますように」と祈れますよう、聖母マリアの取り次ぎを願いたいと思います。



司式される鈴木師

2021年1月10日：主の洗礼B年

マルコ福音書 1章7節－11節

「イエスが洗礼者ヨハネから洗礼を受ける」という記事は、マタイ、マルコ、ルカの各福音書が載せています。もとはマルコだと思われませんが、ヨハネの洗礼が「罪のゆるしを得させるための回心の洗礼」だったことから、その事実を疑問視する意見もあります。ただ、ある時期、イエスと洗礼者ヨハネが共に活動していたという指摘はありますし、キリスト教が、かなり早い段階で入信の儀式としての「洗礼」を定着させていたことから、そこにヨハネの洗礼が大きな影響を与えたことは確かでしょう。

『聖書と典礼』の注書きにもありますが、「洗礼」と訳されたもとの〈バプテスマ〉というギリシャ語は、“沈む”という意味だそうです。水の中にいっ

たん沈んで再び上がることで〈新たな、いのちに生かされる〉ことを表す、と言われていました。

わたしは司祭になってから、それこそ数えきれないほど多くの人に洗礼を授けてきましたが、逆に幼児洗礼者であるわたしは、自分の洗礼を覚えていません。それを考えると不思議に思いますが、わたしが洗礼を受けていなければ、今ここにはいない、ということも事実でしょう。ただ、幼児洗礼者は、みんなそうかもしれませんが、自分の洗礼を大人として体験される成人洗礼の方々を、いつもうらやましく思います。

ひとつ強く感じることは、「洗礼」とは〈神さまとのきずな、結びつき〉のしるしである、ということです。今日の箇所では、イエスが洗礼を受けられたとき「天からの声が聞こえた」とありますが、聖霊が降って来るのをイエスご自身がご覧になったと書いていることから「『イエスご自分の使命を意識されたしるしである』と位置付けられている」とも言われます。いずれにしても、いつもわたしたちと、つながってくださる神さまとのきずな、結びつき、それを聖書では「いのち」とも表現しますが…。それを共同体の中でしるしとして分かち合う、それが「洗礼」である、と言えるでしょう。

興味深いのは「緊急洗礼」と言われるものです。通常は、わたしのような司祭か、あるいは司教が洗礼を授けますが、緊急の場合、つまり命の危険などがある場合は、誰でも授けられることになっています。たとえ信者でなくても、それこそ「誰でも」いいのです。それで有効になった洗礼を、わたし自身数多く体験しています。ただし、唯一、自分で自分に洗礼を授けることはできないのです。誰かに授けていただかないとダメ、なのです。これは、神さまが常に人を通して働かれていることを表している、ということだと思います。そう考えると「洗礼」とは自分と神さまとのきずなだけを示すものではなく、「共同体」つまり〈わたしたち〉の中で、それを通して与えられているもの、と言えるのではないのでしょうか。

「洗礼の恵み」、それは計り知れない大きなものです。先ほども申し上げたように、洗礼を受けていな

ければ、わたしは、ここにはいなかったかもしれませんが。もちろん、洗礼を受けていない人にも神さまはつながっていてくださるでしょうけれど、この世を超えて神さまがわたしたちに、いつもつながっていてくださるし、それをわたしたち人間の側からも求めるのが「洗礼」に他なりません。わたしたちが頂いているその大きな恵みに、改めて目を向け、感謝したいと思います。